

「新しい生活様式」に対応した 展示解説手法の検討

東京工業大学博物館 研究員 宮前 知佐子

1. 東京工業大学博物館の展示とコロナ禍での試み

東京工業大学博物館は、大学創立 100 周年を記念して建設された百年記念館を利用し、大学所蔵の科学史上価値のある機器類や大学の研究成果を一般に向け公開しています。1987 年 11 月に百年記念館は、博物館機能とコミュニケーションスペースを備えた建物としてオープンしました。その後、2010 年に改装され、2011 年に、文化庁から博物館相当施設の認定を受けた大学博物館としての、東京工業大学博物館が発足しました。2011 年以降、現在まで一般公開している東京工業大学博物館の展示室は、下記の 6 つのパートから構成されています。

- 2 階常設展示室 1 東京職工学校創設～新制東工大の発展 29m²
- 2 階常設展示室 2 百年記念館 / 篠原一男 26m²
- 2 階常設展示室 3 電気～光 / 通信の先端研究史 23m²
- 2 階特別展示室 89m²
- 地下特別展示室 A 195m²
- 地下特別展示室 B 179m²

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一時休館する前まで、2 階特別展示室は、企画展示室として利用しており、企画展がある期間のみ公開していました。地下の特別展示室は、特別展示室と名付けられているものの、特別展示室 A ならびに特別展示室 B とともに、大きな展示替えはされず、常設展示室となっていました。

特別展示室 A の主な展示テーマは、建築、陶磁器研究、東工大卒業の工芸家作品、化学・化学工学研究でした。固定式で可動性の低い解説パネルが設置されていたため、展示テーマの変更が困難であり、また、百年記念館は、建物のデザイン自体も見所のうちの一つということと、建物内の内装についても、建築家（東京工業大学でも教鞭をとった篠原一男）の意思により配置されたものが多く、特別展示室 A 内に設置されている展示ケースも、こうした意思を継いで特別にデザインされたもので



図 1 2021 年のリニューアル前の特別展示室 A の様子。2010 年以降変更されことなく設置されていたパネルと特別にデザインされた展示ケースにより、統一感はあるものの、展示替えを困難にしていました。

あり、展示ケースを刷新することができずにいました。この展示ケースは、開口部が415×320mmとなっており、展示品のサイズを大幅に制限しています。以上の理由から、工芸作品を中心に展示品の入れ替えはあったものの、大規模な展示替えは実施されず、実質的には常設展示となっていました（図1を参照）。特別展示室Bの主な展示品は、大型の紡織機械やスターリングエンジンなどの世界的技術遺産（図2を参照）、ロボットなどのほか、照明の調整が必要となるホログラフィー作品などでした。こちらの展示室もまた、展示品を動かし、レイアウトし直すことは難しいため、2010年以降、常設展示同等となっていました。

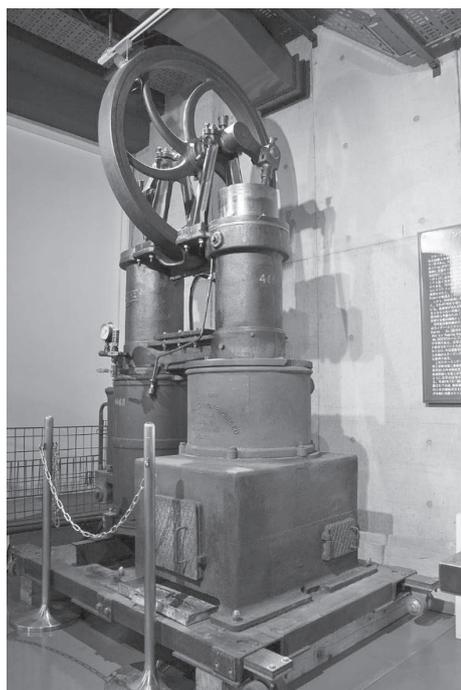


図2 可動状態で保存されている貴重なスターリングエンジン。このような大型機械類は収蔵庫での保管も困難なため、公開をしながら管理しています。

その他、東京工業大学博物館では、1階T-POTならびに3階フェライト記念会議室（収容人数最大100名）の管理・貸し出し業務も担っています。現在は、生協購買部の仮移転のため、1階T-POTの貸し出しを、2021年1月31日以降、一時休止しています。新型コロナウイルス感染拡大防止のため一時休館する前まで、平常時の開館時間は、月曜日～金曜日の10:30～16:30であり、大学の講義の昼休みにあたる時間も開館していました。東京工業大学博物館のコロナ禍における開館状況を時系列でまとめると、下記になります。

2020年1月20日（月）～	9月30日（水）の予定で休館 （コロナの影響ではなく、企画展開催に伴う改修・復旧およびリニューアルのため）
2020年4月7日（火）～	新型コロナウイルス感染拡大防止のため休館
2020年6月22日（月）～	8月7日（金）の期間、開催を予定していた特別展「小森忍・河井寛次郎・濱田庄司—陶磁器研究とそれぞれの開花—」を休止
2020年9月9日（水）～	一部施設の貸し出しを再開
2020年10月1日（木）～	一部展示室の短縮開館（2階展示室のみを公開）
2020年11月12日（木）	インスタグラム上でのコレクション紹介を開始
2021年1月12日（火）	新型コロナウイルス感染拡大防止のため再度休館
2021年2月21日（日）	目黒区との連携講座を目黒区民センターにて開催
2021年8月29日（日）	オンライン科学教室開催

2020年10月からの一部展示室の短縮開館中は、他の大学博物館同様、東京都などの行政

の動向だけではなく、大学独自の感染防止ガイドライン、大学図書館など他の施設の開館状況なども考慮し、以下のような条件のもと、来場者を受け入れていました。

- ・開館時間は10時30分～12時、13時30分～15時30分、見学時間は40分以内に制限。
- ・事務室前で手指の消毒、検温を実施。来場者への連絡用に、連絡先を記帳していただく。
- ・2階特別展示室にて、地下特別展示室のダイジェスト版を作成。2020年3月に受け入れた新規収蔵品である建築模型を中心にレイアウト。
- ・開館・休館などの情報は、博物館ホームページの他、大学博物館フェイスブックなどでも告知。

公開スペースを2階だけに制限したのは、依然としてコロナ禍への対策について手探りの状態であり、どのような条件であれば感染拡大を防げるのかガイドラインが確立していないためでした。そこで、事務室の所在する2階だけに公開エリアを制限することで、事務室前に消毒・検温・記帳スペースを設け、通常業務を行いながら、来場者にも対応しやすい動線を確認しました。また、開館前と閉館後には展示品も含め、廊下の手すりやエレベータのボタンなど、すべての公開エリアの消毒作業を行いました。

東京工業大学博物館では、4月7日にコロナの影響で休館をアナウンスする前から、特別展「小森忍・河井寛次郎・濱田庄司—陶磁器研究とそれぞれの開花—」開催に伴う、大幅なレイアウト変更のため、一時閉館をしていました。これは、展示エリアのスペースの都合上、実質的に常設展示室として公開していた特別展示室Aを、6月からの特別展の展示室として利用するためでした。展示室内すべてのパネルを撤去し、展示ケース・照明などもほぼ全部レイアウト変更を行うという、大掛かりなものです。その後、特別展の休止が決まると、休館中は、これまでほぼ未着手であった収蔵品の棚卸し作業を行いました。

2. 「新しい生活様式」に対応したリニューアル

2021年1月に再度休館が決まると、その後、新しい生活様式に対応した展示についての検討を開始しました。休館中であっても社会との関わりが途切れることのないよう、資料館から発行される「今月の一枚」などの刊行物は、大学博物館フェイスブックの他、大学のツイッターアカウントなどからも拡散を依頼しているほか、インスタグラムでコレクションの紹介をはじめめるなど、これまで以上に、既存メディアを利用した情報発信につとめました。また、近隣の区との連携も積極的に行うなど、休館していてもできることを模索し、2021年8月の夏休み期間中には、一般向けにオンライン科学教室を初めて実施しました。

休館していた期間、収蔵品を整理したことと、特別展開催のため、ほぼスケルトン状態になった展示室Aを活かし、コロナ禍前の状態に復元するのではなく、新しい生活様式になるべく添

う形でのリニューアルを検討した結果、展示室 B のパネルも取り払い、解説文を読むことによる人々の滞留を避けるよう、解説文をオンラインへ移行し、テス



図 3 解説パネルを取り払い、リニューアルした展示室。

ト運用を開始しました（図 3 を参照）。科学系博物館では、展示物の解説文が長くなりがちなため、来場者が一箇所に留まりやすい傾向にあります。長文の解説文をオンライン上に移すことで、来場者に、博物館内では展示物に集中していただき、帰宅後や来館前、それぞれのペースでゆっくり解説を読むことができれば、滞留が防げ、また、館内の滞在時間に制限を設けても見学に支障がなくなると考えました。東工大博物館の展示スペースはそれほど広くありませんので、十分な間隔を確保しながら見学していただくという点でも、周囲の見通しの良いレイアウトが効果的ではないかと考えました。長期的な視点でも、展示替えの度に、物理的にパネルを作成しなくて済むことは、展示替えの時間短縮にもつながるため、これまでよりも短い頻度で展示替えを行い、来る度に新たな発見のある博物館を目指して行きたいと考えています。

現在、オンライン展示解説のプラットフォームには、「note (<https://titech-museum.note.jp/>)」を利用し、運用を試みています。既存プラットフォームを利用することで、PC やタブレット、モバイル端末へのコンテンツの出し分けを考えずに済むこと、動作確認などメンテナンスに人手を掛けずに済むことなどのメリットがあります。コンテンツ作成の面では、レイアウトなどの自由度は下がりますが、常勤のスタッフが少なく、入れ替わりのある東工大博物館では、より直感的な UI (User Interface) が用意されている既存プラットフォームの方が、業務を円滑に進める上でもメリットがあります。また、コンテンツの修正も容易なため、資料整理を進めながら、同時にコンテンツを公開することが可能です。

展示の解説パネルを撤去し、オンラインへと解説文を移行した代わりに、各テーマごとの解説文をまとめた note 上では「マガジン」と呼ばれるフォルダの URL の QR コードを展示室のマップに貼り込んだ博物館地図を用意しました（図 4 を参照）。上述の通り、展示室内では展示品に集中していただくという効果を狙ったほか、地図に QR コードを埋め込むことで、帰宅後にも、館内での自分の軌跡を追体験していただきながら、じっくり解説文を読むことで、展示品への理解を深めていただけるのではないかと考え、展示品に番号を振り、上から順番に URL を記載するというようなリスト形式ではなく、地図形式で、試験運用を行いました。

試験運用では、「新しい生活様式」に対応したリニューアル展示手法の検討のため、最初に、「科学史」の講義を受講している学生（学部 1～2 年が中心）の中から、博物館見学を 27 名に、実際に展示を体験していただき、アンケートに答えていただきました。

